

シンポジウム

① 一鍼二灸三薬～鍼灸と湯液の関わり方～

一般社団 北辰会 代表理事 藤本 新風

2200年程前に成立した中国伝統医学のバイブル・『黄帝内経』を紐解いてみるに、その内容は鍼灸に関することが圧倒的に多い。唐代の薬王・孫思邈は自著・『千金方』において、「鍼を知り、薬を知ってこそ良医である。」と明言し、明代の鍼灸書『鍼灸大成』の標幽賦の注釈では、「又語云、一鍼、二灸、三服薬。則鍼灸爲妙用可知。」と記されている。このことは、中国伝統医学自体、時代が下るにつれ鍼灸薬が別々に施されるようになったこと、また、鍼灸が廃れてきたことに対する警鐘とも言える。さらには、臓腑経絡・経絡経穴をベースとして生理・病理を認識することの重要性を暗に含んでいるものと考えられる。

漢方エキス製剤の創製、および保険適用によって、多くの患者さんが漢方医学により健康を享受できる機会が増加していることは大変喜ばしい。現在では漢方医学（和漢）のみならず、現代中医学の見地から湯液処方をされる先生も一定数おられ、ますます湯薬治療は盛んとなっている。

講演では、中国伝統医学の根幹をなす臓腑経絡学・経絡経穴学の重要性、および、それらの実際の運用の在り方（経穴診）について示したい。漢方診療をされる先生方、また、漢方診療を志す医学生への参考に供し、鍼灸に対する認識を深めていただく機会にしたい。

医鍼連携が隆盛してきているなか、鍼灸師が最低限レッドフラッグサインを見落とさず医療機関に送ることは重要事項である。しかし、まず鍼灸医術を施す鍼灸師こそが、『内経』以来の中国伝統医学の診察・診断学に精通しておくことが肝要である、ということも申し述べておきたい。